

2021年9月自然を語る会

「生物と無生物のあいだ」 8章以降を読む

日時：2021年9月18日

場所：飯田橋ボランティアセンター＋zoom

参加：19名

担当：鈴木善次さん

前回読み始めた『生物と無生物のあいだ』の後半を読み進めた。本書の目的は「生物とはなんだろう?」ということだった。前半での一つの定義としては「自己複製するシステム」であった。しかしそれだけでは不足だろう。生物と無生物を我々は瞬時に見分けられる、なぜ?それは生物には秩序がもたらす美、動的なものだけが発する美があるようだ。

シェーンハイマーは放射性同位元素で印をつけた食べ物をネズミに与え、食べたものが体内にどのように分布するか追跡した。その結果体内のあらゆる部位に分散することが示され、この結果を「身体構成成分の動的状態」として発表した。「生命とは代謝の持続的変化であり、この変化こそが生命の真の姿」としたのである。著者はシェーンハイマーの述べた「動的状態」を「動的平衡」(絶え間なく壊される秩序)と表現した。

この動的平衡が維持されるのは、タンパク質のゆるやかな相補性のお陰である。また生命は機械のように部品の置き換えができるものではなく、常に時間の流れがあり、その流れは不可逆であると主張している。

最後に、文庫版『センス・オブ・ワンダー』の後に書かれた福岡さんの文章から「生命現象とは常に積極的に破壊されながら作り変えられていく、極めて流動的なもの。この動的なバランスの中に時間の流れに抵抗し、エントロピー増大の法則にあらがおうとする生命本来の努力がある・・・その努力のことを「動的平衡」と呼ぼう」との言葉が紹介された。

生命とは結局どのようなものと言えるのだろうか。参加者の声としては

- ・宇宙には多くの惑星が見つかった、その中には生物がいるのではないかと考えられ、実際に生命がいるかどうか調査も行われるようになってきています。
  - ・AIに心を持たせられるかどうか、そうするとAIは生きているのかどうかにつながっていくのだろうか。
  - ・パラリンピックで、生命の不思議を感じた、選手たちの気迫にいのちの可能性を考えました。
  - ・老いの坂を登るか下るかという話で福岡さんに聞いたところ「人間はエントロピー増大にあらがって生きるので、登るでしょう」と言われました。
  - ・積極的に破壊するという話が特に記憶に残りました。
- など、いろいろな想いが発表された。

(文責：小川)